

## 文芸学と文芸理論

實 方 清

### 一

文芸を研究対象とする学問を文芸学と呼ぶことは明白である。日本文芸を研究対象とする学問は日本文芸学である。これは明白な存在であって、決して幻想でも虚構でもない。文芸が存在する以上文芸学が存在することは明白である。この明白な原理は近代科学の光の中でもを考えることに於て認められるもので、雑学の中に家内工業をこととする国語国文学の領域や、文学研究又は文学論の世界では文芸と文芸学の原理は永久に理解されないであろう。文学と文学論の関係の中で対象と学との関係を十分考えられるとする一派の学者が存在するが、それは学的世界というものを考えない単なる文学批評の中で学的研究を考えている者に過ぎない。文芸学を考える根拠は文芸の確認にある。世の中の文学研究者という一群の中には本当の意味でこの文芸という世界の確認が出来なくて、文芸でない世界を文芸であるとし、それを研究することが文芸研究であると錯覚している者が多いようである。ここで文学か文芸かということが最初に問題となることであり、それは分り切っていると考える者の大部分は実は分っていないのである

と考えてよい。文学ではなく文芸であるということが分ることが文芸学への出発点であり、文芸学的研究の第一歩である。文芸ではない文学であると考える者の大部分は、その文学を文献や言語であるとしている。文献の研究をしたり、言語の解釈の研究をしたりすることが文学の研究であると考えている。文学は文学作品のことであるという極めて初歩的な認識すら持たない文学研究者や国文学者の存在は現在の学界の状況である。これを根本的に正しない限り、真正の文芸研究は望み得ない。形として存在している文献の成立や本文の研究をすることが文芸の本質の研究だとし、文芸を文芸として研究する文芸学などは幻想か虚構の世界であると本当に考えている者が居ることを思うとそぞろに哀憐の情を催すものであるが、これこそが錯覚であり幻想であって、日本文芸学の世界で言えば、万葉集という文芸の世界は実在するのであり、源氏物語という文芸の世界は明白に存在しているのである。文芸学が幻想であり、虚構であるとするのは、その万葉や源氏物語という文芸の世界をその文字で書かれた文献であると錯覚しているのである。これこそその出発点において錯覚があり、幻想に迷った世界意識がみられるのである。従ってそういう者からみれば真正な文芸研究の世界である文芸学が錯覚と見え幻想と感じるであらう。だから文芸学の出発点は文芸とは何かという命題である。これが正しく認識されない限り、文芸研究という学的世界は成立しないのである。これは日本文学の研究だけではない。英文学や仏文学又は独文学の研究においてもこれと同じことが言われる。ただ日本に於ては英文学作品の文献学的研究ということがそう簡単に出来ないで、国文学の場合の文献研究とはやや状況を異にするものであるが原則的には同じである。英国における多くの文芸作品はこれを総称してイギリス文芸と称し、これを研究対象とする学をイギリス文芸学と言うべきであって、単に英文学というような言葉は最も漠然としたもので、それは対象であるか学の世界であるか全く知ることが出来ない。このような曖昧な言葉は学問の世界では絶対に避けなければならない。英文学をやっていると、アメリカ文学をやっているという言葉は、この英文

学が英文学を対象としての研究の世界を意味しているようであり、英文学の意味の如く思われる。明確な認識世界を中心とする学的世界において、こんな不明確性と曖昧性が許されるであろうか。これは文学研究者の非科学性であるなどと言ってすまされないことである。文芸の学的研究はあきらかに学の世界であり、精神科学の世界であるから文芸学の世界はどこまでも科学的でなければならぬ。それは従来の文学研究者の曖昧な対象認識や方法論とは根本的に異った精神科学的方法が要請されるのである。

文芸学は文芸を研究対象とする学問であり、作品の文芸構造を明らかにし、文芸の本質を認識する学的世界である。この文芸学では第一に対象認識の明確ということが必要である。対象認識の明確性のないところには学的世界は成立しないのである。そして文芸学はあきらかに一個の精神科学である。文芸学の研究対象は作品の中に具象化されている文芸そのものである。研究の成果は抽象的なものを求めるが、その対象は具象的な世界であることは明白である。具象的な文芸現象の中から抽象的な本質世界を認識するところに文芸学成立の基盤が存在する。その文芸学の対象である文芸というものは、従来の文学というような雑多な概念ではなく、純粹に芸術としての文芸性の世界を意味するものであることは既に幾度か述べたところであり、いまここで再び述べる必要は認めない。ただ注意しなければならないことは、文芸という言葉を用いることの出来ないような考え方の者は、文芸の本質内容への認識はないもので、文学は文献や言語であると自ら考えて変えることのない雑学的世界を対象に考える者であると言える。言葉の用い方は何んでもよいと言う考え方も存するが、学問研究の世界ではこの言葉の用い方が極めて大切であって、言葉の用い方によってすべてが規定されることを知らなければならない。だから文学でも文芸でもどちらでもかまわないというような考え方は極めて非学問的であって、それは雑学の世界の外何物でもないと言うべきであろう。文学という言葉はかつて文献や言語の世界を表象したものであり、現在も尚それを現わしているが、文芸という言葉は文献や言

語ではなくして、言語によって表象された芸術的世界を表現したものであるから、文学という言葉を用いるのと文芸という言葉を用いるのでは根本的に異なるものがある。これは文芸学を考えるに当って最初に大きい問題となるものである。一部には文学というものを文献や言語と区別して文学作品の世界を認め、これを研究しているものもあるが、それならそのような文学作品は文芸であり、それを研究する学問の世界は文芸学であると明確に規定できる文芸学の世界をどうして認めることが出来ないであろうか。従来の文学という誤った言葉の觀念に捉われて、この文学という言葉をもよい言葉であると盲信している学者がいかに多いことであろうか。文芸か文学かという問題が出るとき、文学という言葉が不適當で学術的用語としては文芸という言葉が最も適切であるということとは、多くの説明を要せずして明確であろう。文芸と文芸学という關係が認めることの出来ないものは、文芸という言葉表象の芸術を研究する資格のない者と考へて誤らないであろう。現在正しい名称であると考へて用いている国語国文学という言葉、それからくる国語国文学会という学会の名称などは、正しく学問の世界を認識した者の用いる言葉ではあり得ないであろう。このような雑学の世界を示現する言葉は速やかに解消すべきである。

## 二

文芸学は文芸を対象とする科学的研究であるから、文芸学そのものに主体が存することは明白であり、この主体としての学には色々な方法論が可能であり、そこに方法の概念が存するのである。従つて嚴密には文芸学と文芸理論とか、文芸学と文芸史という言い方は適當ではないが、文芸学において文芸理論がいかなる方法概念的意義を持つかということを明らかにする点で、省略的用法において文芸学と文芸理論として考へようとするのである。だから本当は

文芸学に於ける文芸理論の方法概念的意義という題目となるのである。文芸学と文芸理論の關係はやや抽象的であるから、日本文芸学と日本文芸理論という具體的なものを取りあげて、その具體的關係について考察してみよう。この日本文芸学という言葉は、言われ出してから既に三十五年を経過しているが、学界共通の言葉ではなく、一部の者の言葉である如く考えられている。そして大部分の人達は、国語国文学という言葉を用いて自ら正確であり、それが真正の学的世界であると考えているのである。まことにそれは錯覺と混同そのものであつて、このような合理性の欠如した難学的な名称である文学や国文学という言葉は一日も早く除去すべきであると思う。かつて竹友虎雄教授はその生前文芸学の不要を論じ、文学論と文学との關係の中で学と對象の關係が規定されると説き、私との間に論争らしきものか行われたが、このような考え方に對しては私は本格的な論争をすることを避けた。文芸と文学論の關係は、文学を學的に研究する學問的世界が文学論であるとするのであるが、論には学の中にみられる學的本質と學的本系が認められない。このような不明確な言葉を用いることを固執して、眞の學的世界の喪失を自ら招くのであろうか。まことに不可解な心情と言わざるを得ない。文芸と文芸学との關係の中で學的世界を形成して行くことの合理性が理解出来ないようでは、その出発点に於て文芸研究の資格がないものと認めざるを得ない。そのような人々は文献学という言葉を用いて文献の研究を行えばよいのである。しかしそれは文献の研究であつて、決して文芸の研究ではないことを銘記すべきである。

文芸学は主体的世界である。と同じように日本文芸学も主体的世界である。日本文芸学が主体的世界である如く、日本文献学もまた文献研究に於て主体的世界である。私は過去二十五五年間に亘つて国語国文学の解体を主張し、それは日本文献学と日本語学と日本文芸学との三つの學的世界とすべきであることを強調した。これ等は各々の研究分野を異にする獨立した學的世界であるが、しかし三者は密接に協力すべきものであることを考えいまもこれを主張し続

けているが、聞けども聞えざる所謂文学研究者があまりにも多いようである。日本文学や日本語学はそれ自体一つの主体的学問の世界であり、価値認識の世界であるが、日本文芸学にとっては前提的存在であり、補助的存在である。文献研究ということは極めて重要な学的作業であるが、その目的である原典の確定ということは日本文芸学の基点である。この文献研究がいかに科学的に行われたとしても、それが日本文芸の本質的体系的の研究に関係するものではない。この文献研究が文芸研究の世界に置きかえられたところに従来国文学の混同があったのである。この混同と錯覚とを除去するためには、家内工業的雑学から近代工業的分業の専門の学へと移り変ることが必要である。それは国語国文学の解体という大きい革新が即ち家内工業近代工業へ移るための産業革命に比する学的革新が必要である。この学的革新を行わない限り、国文学という世界は家内工業的であり、雑学の世界を脱することが出来ないのである。言語学というものが割合明白に考えられている今日言語の研究と文芸の研究とは次第に区別されてきたが、しかしまだ言語研究者の中には文芸と言語の区別が分らず、言語の研究が文芸作品の中心的研究であるなどと錯覚している者もいるが、日本語学というものは日本文芸研究にとってはあくまで補助学的意味しかないものであって、文芸作品の言語解釈というものは文芸の研究の主体的世界では決してなく、補助的意味を持つものに過ぎないことは、文芸学の世界に於て理解しておく必要がある。文芸作品の構成において言語というものは表現の媒介意味だけではないものであって、言葉が存在意義を持つのはそれが人間の思想や感情を表現し得るからである。若しある言語学者が言語の絶対性を考え、言語の主体性を主張し、言語は人間の思想や感情を表現する媒介的意義を持つだけでなく、表現された思想や感情そのものが言語であると考えるならば、それはむしろ言語が思想の中に吸収されてしまったことを意味するもので、言語の主体概念は存在せず方法概念として考えられるものである。この故にこそ文献学と言語学と文芸学とは密接に関連性を持つものであるが、主体的には別々の学的世界であることを認識すべきである。

文芸学と言えは日本文芸学が考えられ、日本文芸学では岡崎義恵博士の説かれた日本文芸学が考えられる。そして文芸学即岡崎文芸学であるかの如く言われているが、これは普遍的な学問の世界ではそのまま許容されることではない。文芸学即岡崎文芸学即様式論的文芸学という固有名詞の関連が成立しているかの如くである。たしかに学界の現状ではその実質はある程度認められるであろうが、文芸学はあくまで普通名詞であって、一人の者の学問ではない。学問の世界の普遍性というものは、一つの学問の方法に統一された処にあるのではない。岡崎義恵博士の説かれた文芸学はまことに壮大ともいふべきものである。しかし日本文芸学が普通名詞である以上、そこには色々な方法論の可能性が存することを認めなければならない。岡崎義恵博士はその様式論的方法によって日本文芸研究の世界でまことに輝かしき業績を出し、私達の敬仰するところであるが、それが日本文芸学の総てであると考えればやはり誤りを犯すことになる。日本文芸学は文芸学の理論の上に考えられた日本文芸の学的研究の世界であるが、それは普遍的世界であって、方法論を異にする色々な学的世界が展開される筈である。私が文芸学と文芸史の理論を二年ほど前に発表し、いままたここで文芸学と文芸理論に関する考え方を述べようとすることも文芸学のそして日本文芸学のより広くより深い普遍的世界の存在を可能ならしめるためである。文芸学における様式論的方法と共に更に文芸史的方法や文芸理論的方法の可能性を考えようとするものである。文芸学の理論は割合に主張し易いが、その方法論の問題はまことに重大であって、この方法論によってのみその人の文芸学の世界が本質的に形成されて行くのである。従って文芸学においては方法論の重視が確認されなければならない。この意味に於て私達が日本文芸学会を創立して、日本文芸学に関する色々な方法論的可能性の中で日本文芸の学的研究の進展を考えていることは、この意味において理解されるであらう。学会という全国的な公器の中でその方法論的可能を討論し切磋し合うことに文芸学の進展を期待しようとするものである。

## 二

日本文芸学の理論は文芸学の理論に基づいている。この文芸学に関連して最近は色々なことが言われている。文芸学を理論的文芸学と史学的文芸学としたり、文芸史学を考えたり、文芸学は歴史学を導入すべきであるとして、文芸学と文芸史学又は歴史学を対置している。文芸学は歴史性を否定していると述べ、歴史性のない文芸学は自己崩壊すると言ひ、文芸に関係のない一般歴史の概念を導入して、その地点で文芸学の成立を認めようとする者さえある。まことに学問的戦国乱世というべきである。文芸学は文芸の本質を明確にし、それを体系的に認識する学的世界であつて、それ自体が主体的世界である。文芸学はただ一つである。文芸学に理論的文芸学や史学的文芸学などというものはない、文芸学に対して文芸史学が考えられたり、文芸史と文芸史学が考えられたりすることは明らかに誤りである。文芸学に理論的文芸学と史学的文芸学があるのでは絶対になく、文芸学というものは文芸の本質性を歴史性を通して把握認識するという点で理論的な面と歴史的な面との関連がその方法概念として考えられる。文芸史という主体的な世界があつて、それを対象とする文芸史学という学的世界が存在するのではない。文芸学に於て文芸史は主体概念ではなく方法概念である。その方法概念が学の対象となつて、別に一つの主体的な学の世界を形成するということはあり得ない。文芸と文芸学の関係と同じように文芸史と文芸学が成立するのではない。文芸史は文芸学の方法概念である。それは文芸理論が文芸学の方法概念であると同じである。文芸理論を対象とする文芸理論学が成立するということではなく、文芸理論は私の文芸学の理論と方法とにおいては文芸史とともに文芸学の方法論の両翼を成すものであると言へる。文芸学の対象としての文芸はあくまで具象的な文芸作品の世界であり、決して抽象化され様式化さ



れた文芸の世界ではない。この文芸を様式化することにより文芸学が成立するものもあれば、また文芸を文芸史と文芸理論との二つの方法において文芸学の研究を遂げしめる世界もある。それは単に一本の道だけではないであろう。

文芸学は文芸を研究する学問の世界である。この文芸という芸術的世界の研究において、その方法論が重要なものとして要請される。私はここで自ら最も妥当的であると考えている文芸学の学的三角形による方法を述べよう。文芸学という主体は美学と文芸理論と文芸史との三つのものによる方法が適當である。即ち美学という基礎的底辺に立つ本質に関連する文芸理論の一边と歴史性に関連する文芸史の一边とのこの両辺が文芸の本質性という項点を志向する学的三角形の世界が文芸学の方法論の世界であり、これが日本文芸学の方法論でもあると言える。ここで文芸理論というものが文芸史とともに方法概念として文芸学に深く関係しているものである。文芸理論は文芸学という学的三角形の一边を形成している。もう一边は文芸史であり、その底辺は美学である。その底辺である美学についても美学と文芸美学ということが考えられる。文芸学という学的三角形の底辺は一般美学が適當であるか、それとも文芸美学が適當であるかということが問題にされるが、しかし厳密に考えると、文芸美学という美学が果して成立するであろうかということが問題となる。美学の一部門が特殊美学かという点で文芸美学が成立するであろうか。私は最近文芸学三角形の底辺は美学であつて、文芸美学ではあり得ないという考え方に進んで来ている。文芸美学というものの成立について私は二十年前から考えて来た。そして文芸学の基礎学は美学ではなくして文芸美学であると考へた時期もあった。しかし純粹に学的に考えると、文芸美学が文芸学の方法論として可能であろうかということが大きく問題となつて来た。文芸美学とは文芸の美学であるか、文芸美を対象とした学の世界であろうかが明白ではない。しかしこれは文芸美を抽象化して学的世界を形成したものと思われるので文芸美と文芸美学の関係が出てくるのであり、これは文芸と文芸学の関係と同じく考えることが出来るであろうか。しかし文芸美というものは文芸の本質に通ずるもので

あり、文芸美を対象とする学は、文芸の本質を対象とする学と同じであり、むしろその中に吸収されるものであるから、必然的に文芸学に吸収される筈である。文芸の美を研究する学と文芸の本質を研究する学との相関に問題がかつてくるのであり、文芸美学が文芸学の方法として定位することには問題が残されていると思われる。この意味で私は文芸学の基礎学は特殊美の一切を包含して抽象化された美学が妥当であると思われる。

文芸学と文芸理論は以上述べたように関係の中にみられる。文芸理論とは文芸の本質把握と価値認識の世界であつて、日本に於ては極めて多くの文芸理論が存在している。日本文芸学と日本文芸理論との関係の中で具体的に考えることが出来るのである。日本の文芸理論は抒情文芸理論に中にすぐれたものがみられる。文芸学が文芸の本質や価値を研究するものである以上、文芸理論による究明を必要とする。文芸の本質性は文芸史と文芸理論の二つの方法の中で認識されるものであり、文芸学において問題とされて来た歴史性もこの文芸史の方法によって十分に究明されるものである。文芸の歴史性の問題が色々論じられたが、文芸の歴史性ということは文芸性の歴史性のことであつて、文芸が一般歴史とどのように関連しているかということではない。文芸はそれ自体が一つの生命体であるから、流動発展することは必然である。文芸学で問題とすることは文芸が歴史の中でどんな意味があるかというような問題ではなくして、文芸性が種々の状況の中でどのように展開して行つたかの問題が問われるのであり、これは文芸史の問題として考えられるのである。文芸理論というものは文芸の抽象的理論的認識であるから、文芸の本質はこの文芸理論によつて明らかにされる所が多い。日本の抒情文芸理論には歌論・連歌論・俳論及び詩論が認められ、この中で長い歴史を持ち最もすぐれたものは歌論である。歌論は古今集序よりはじまり、とくに中世歌論の世界は最もすぐれたものである。新古今集という文芸作品を対象として研究する文芸学においては、新古今的歌論というものが大きい意義を持っているように思われる。新古今集の美的世界は新古今時代の多くの歌論や歌合判詞における批評意識によつ

て究明され認識されることが多いのである。和歌の世界に於ける幽玄美の究明などは、中世の歌論における幽玄美の内容を理解せずしてこれを明らかにすることは困難である。

#### 四

文芸学における文芸理論と文芸史の方法による文芸の本質究明ということは極めて重要なことであり、これは文芸学に於ける理論主義と歴史主義の問題に関連している。すべての学問研究には抽象的理論的な面と具象的歴史的な面との考察が必要である。私は四年程前に日本文芸学における理論主義と歴史主義という論文を書いたが、この理論主義は文芸理論によって考えられ、歴史主義は文芸史によって考えられるのである。日本文芸学理論即ち文芸理論と歴史主義即ち文芸史の総合統一的研究によって、日本文芸の本質が認識されるのである。さきに新古今集という文芸の研究における具体的方法の問題について若干述べたが、新古今集という世界は新古今時代の文芸理論によって考察し、それとともに文芸史的考察が必要である。この文芸史的考察とは新古今集という文芸性の世界が抒情文芸史の上でどのような発展の流れの中に形成され位置しているかということを明確にするための考察である。即ち文芸性の歴史的展開の流れの中で新古今集という文芸を定位せしめ、これを新古今時代の歌論によって本質把握と価値認識を行い、これによって新古今集を文芸作品として学的に認識しようとする処に学的研究の方法があり意義があると思われる。そしてこの研究の基盤にはつねに美学が存し、この美学の底辺の上に立つ文芸理論と文芸史との両辺による学的三角形に日本文芸学という世界が存在するのである。この美学は文芸学の基礎学であるが、美学が決して文芸学そのものではない。そして文芸学も美学ではない。だから若しも日本文芸の研究において、日本文芸に現われた美を考

察しこれを抽象化しようとする研究があるとすれば、それは日本文芸学ではない。日本文芸の中から美を抽出し、これを抽象化することによって様式化しようとすることは真正の日本文芸学ではない。それは美学であり、日本美学ともいべきものであろう。日本文芸学は文芸の中から美を抽出してこれを抽象化しようとするのではなく、芸術としての美が文芸作品の中にいかに具象的に表現されているかという美において捉えられた文芸構造の究明こそが日本文芸学の世界である。美学に関連して日本美学ということが色々と言われているが、日本文芸学は日本美学ではない。美ということを考えるとき、その美が最も端的に表現され明らかにされているものは文芸理論の世界である。日本美学というものが日本文芸理論と密接に関連を持つということはここにあるのである。幽玄美というものは中世の和歌に最もよく表現されているが、歌論上の美的理念としての幽玄は、中世歌論の上で最も深く考えられたものである。日本文芸理論の世界は日本美学の実質内容を形成しているものであり、日本美学というものが考えられるとすれば、この日本文芸理論はその基盤となるものであり、ともに日本文芸学に大きい内容規定をなすものである。

文芸学において文芸理論と文芸史とは鳥の両翼の如きもので、二つとも研究において必要であり、その一つを欠くときはそれは十分なものではない。日本の文芸理論は極めて豊富な内容を持っており、歌論・連歌論・俳論・詩論の外に物語論・戯曲論・小説論等に亘って広汎内容を持っている。例えば近代の自然主義小説を研究する場合、その自然主義小説そのものの研究だけでは不十分であり、その方法論として文芸理論が必要であるということは、近代の自然主義小説理論が極めて多く、自然主義小説論という文芸理論の世界が十分認められるのであり、この知識を通して自然主義小説を考察するとき、理論的体系的に明白に認識し得るのである。この自然主義小説理論に關係なく自然主義小説を研究することも出来るであろうが、そのときは研究者個人の主観的な批評に終るおそれが多いのである。学問研究の世界がつねに普遍性を求め、共感性の中で真理を求めるものであるとすれば、過去の人々によって把握さ

れ認識された小説の本質論を研究の上に用いるということが、いかに合理性と客観性を増す所以であることが分るであらう。この意味で文芸史によって文芸性の歴史性をはっきりと知り、その上に文芸理論によって文芸の本質的世界を考へることは、日本文芸を学的対象とする日本文芸学においては極めて重要な学的方法であるということが出来るであらう。文芸理論はかくの如く文芸学の方法論の一翼をになう重要な方法論である。従つて日本文芸理論の世界は、日本文芸学と深い関連においてそれ自体研究され体系化されることが必要であり、それは直ちに日本文芸学に最も必要な方法論の世界を附与するものである。だから広い意味では日本文芸理論の研究も日本文芸学の世界に属するものであり、日本文芸理論と日本文芸史の研究が完成されるならば、それに伴つて日本文芸学もまた完成の域に向ふことが出来るのである。しかし日本文芸学と日本文芸理論は並立概念として考へることは出来ない。どこまでも日本文芸学が主体概念であつて日本文芸理論や日本文芸史は方法概念であることは明確にしておかなければならない。しかし日本文芸史を研究することにより、また日本文芸理論を体系的に認識することにより、日本文芸学が明らかな成果として認識されるものである。このように両者はまことに密接な関係の中につねに存在し、学問の正しい在り方を示しているのである。

日本文芸学における日本文芸理論と日本文芸史は極めて重要な方法概念の世界であることは既に述べた如くである。特に従来行われて来たそして現在も行われている文学史の概念との関係においては文芸理論と文芸史というものが学問的重要性を持っている。文芸理論にあまり関心がなく文芸史の内容が単なる文学史であるならば、そこから真の文芸研究が成立するわけがない。そこにはただ雑学が存在するだけである。文芸理論に支えられない文芸史は文芸の本質把握の根拠がなく、文芸史の上に立たない文芸理論も空疎なものとなる。その意味で文芸学に於てはこの文芸理論と文芸史の総合的研究が重要であることは言うまでもない。日本文芸を研究対象とする日本文芸学は日本文芸理

論に支えられるものが多い。例へば連歌という日本文芸の研究においては、連歌そのものを研究すればよい訳であるが、それでは研究者の主観的批評に終るおそれがある。研究をして主観的批評から救い共感的客観性を持たしめるものは文芸理論に支えられ、文芸史の認識に立脚した研究である。連歌には当時から連歌の本質を論じ価値を批評した連歌論という文芸理論が存在する。この連歌論を研究し、その知識によって連歌研究を行えば正しい連歌の学的認識が可能である。従って連歌論を研究しこれを史的認識の上に体系化した研究が存在するならば、それは連歌研究の最も重要なものとなるであろう。このため先ず日本文芸理論の本質体系的研究が必要である。文芸を学的に研究する文芸学はこのように文芸理論と文芸史の二つの方法に支えられてその学的認識が可能であることを知るべきである。